



日本獣医師会学会関係情報



日本産業動物獣医学会・日本小動物獣医学会・日本獣医公衆衛生学会

日本獣医師会学会からのお知らせ

☆平成 27 年度 日本獣医師会獣医学術学会年次大会（秋田）日本獣医師会関係企画のご紹介

大会 1 日目 平成 28 年 2 月 26 日（金）

13:00～15:30 秋田キャッスルホテル（放光の間）

シンポジウム「マイクロチップ装着活動の展開 —平成 30 年改正に向けて—」

- 〔開会挨拶〕……………藏内勇夫（日本獣医師会）
- 【基調講演】我が国における個体識別の取り組みと課題……………則久雅司（環境省）
- 日本獣医師会における取り組みの経緯と今後の対応の方向……………境 政人（日本獣医師会）
- 地方行政機関の立場からの期待と課題……………新井英人（東京都動物愛護相談センター）
- 獣医療の立場からの期待と課題……………細井戸大成（日本獣医師会）
- 動物愛護福祉の立場からの期待と課題……………東海林克彦（日本愛玩動物協会）
- 〔総合討論〕

15:30～18:00 秋田キャッスルホテル（放光の間）

シンポジウム「女性獣医師の就業継続とキャリアアップを目指して —支援のためのプラットフォームの構築—」

- 〔開会挨拶〕……………藏内勇夫（日本獣医師会）
- 〔問題提議〕我が国における女性獣医師の就業支援の取り組み……………大石明子（農林水産省）
- 医学分野における支援の取り組み……………小笠原真澄（日本医師会）
- 行政機関におけるロールモデルと成果……………渡辺万喜子（秋田県湯沢保健所）
- 獣医療分野における取り組み……………栗本まさ子（日本獣医師会）
- 〔総合討論〕

大会 2 日目 平成 28 年 2 月 27 日（土）

09:00～12:00 秋田キャッスルホテル（放光の間）

シンポジウム「One Health を考える」

- WVA の活動戦略（世界戦略）とその期待……………Johnson Chiang（WVA）
- FAVA の活動戦略（アジア戦略）とその期待……………Achariya Sailasuta（FAVA）
- 日本医師会の活動戦略……………横倉義武（日本医師会）
- 日本獣医師会の活動戦略……………藏内勇夫（日本獣医師会）
- 〔総合討論〕

14:00～17:00 秋田アトリオン（多目的ホール）

シンポジウム「国際水準の獣医学教育の確立 —参加型臨床実習の環境整備—」

- 〔開会挨拶〕……………藏内勇夫（日本獣医師会）
- 【基調講演】参加型臨床実習への課題と期待……………辻 直人（文部科学省）
- 獣医学系大学の取り組みの現状と課題……………佐々木伸雄（元東京大学）
- 家庭飼育動物臨床分野における課題と支援のあり方……………滝口満喜（北海道大学）
- 産業動物臨床分野における課題と支援のあり方……………猪熊 壽（帯広畜産大学）
- 医学教育における取り組みの現状と提言……………小森 貴（日本医師会）
- 〔総合討論〕

大会 3 日目 平成 28 年 2 月 28 日（日）

09:00～12:00 秋田キャッスルホテル（矢留の間）

市民公開シンポジウム「食の安全を守る獣医師 —管理獣医師を知っていますか？」

- 【基調講演】我が国の管理獣医師を取り巻く情勢……………大石明子（農林水産省）
- 肉牛飼育における管理獣医師の役割……………大橋邦啓（農場管理獣医師協会）
- 流通から見た FMVA 認証と生産現場に望むこと……………植村光一郎（ミートコンパニオン）
- 消費者から見た食の安全・安心……………廣田美子（さいたま市消費者団体連絡会）
- 肉食によるケトジェニックダイエット……………斎藤糧三（順天堂大学）
- 〔総合討論〕

13:00～16:00 秋田キャッスルホテル（放光の間）

教育講演「職業倫理の醸成 —社会的信頼を得るために—」

- 〔開会挨拶〕……………藏内勇夫（日本獣医師会）
- 【基調講演】獣医師に求められる職業倫理の向上……………大石明子（農林水産省）
- 大学における獣医学倫理教育の実践……………杉谷博士（日本大学）
- 獣医療における職業倫理……………牧野ゆき（日本獣医生命科学大学）
- 臨床獣医師から見た職業倫理の在り方……………小林元郎（東京都獣医師会）
- 法律専門家から見た獣医学倫理と獣医師への期待……………渋谷 寛（渋谷総合法律事務所）
- 〔総合討論〕

平成26年度 日本獣医師会獣医学術学会年次大会（岡山）
地区学会長賞受賞講演（四国地区選出演題）

[日本産業動物獣医学会]

産地区—5

母豚における浮腫病関連遺伝子保有状況調査

鈴木幹一郎¹⁾, 小林秀樹²⁾

1) 徳島県徳島家畜保健衛生所, 2) 独立行政法人農研機構 動物衛生研究所

はじめに

浮腫病 (ED: Edema Disease) は、肥育豚において志賀毒素産生大腸菌 (STEC) を主因とする突然死を主徴とし、治療困難の為、その予防対策が重要である。ED は哺乳豚の STEC 経口感染が発生要因の一つであり、分娩後数日間の母豚糞便の STEC スクリーニング検査は農場汚染の実態調査に有効と考えられるが、それを実証した報告例は少ない。今回、ED 発生1農場において母豚糞便中の STEC の ED 関連病原遺伝子の保有状況を調査した。また、病性鑑定制豚、下痢便等の遺伝子検査についてコロニーダイレクト PCR 法で実施した。

農場概要

母豚数200頭の一貫経営で、2012年4月以降、EDが散見。同年11月には肥育豚の約10% (35頭/月) の死亡があったため、飼養豚全頭にコリスチン (CL) を投与したが改善しない状況であった。

材料

母豚におけるEDのコロニーダイレクトPCRスクリーニング検査 (EDCD-PCR): 2013年5月~9月の浮腫病発症期間中、出産ストレスを受けた分娩1週間以内の母豚糞便117頭分及びED終息後の2014年6月以降の分娩1週間以内の母豚糞便106頭分について調査した。また、ED豚の病性鑑定に供した解剖豚12頭、環境27カ所、下痢便8頭からそれぞれ分離したED起因を疑う大腸菌453株を供試した。

方法

糞便における浮腫病関連遺伝子 (*stx2e*, F18ab 及び *eae*) 検出は、培養継代によるそれら遺伝子の欠落を防ぐため、増菌後、DHL寒天培地、羊血液寒天培地に塗抹培養後、直ちに、 β 様溶血コロニーを含むコロニー群を大量に掻き取り、凍結保存すると共に、一部を煮沸法によりテンプレートDNAを作製しPCRに供試した。母豚糞便は上述の浮腫病関連遺伝子を含む、毒素 (*stx2e*, LT1, ST1, ST2, EAST1) 及び接着因子 (*eae*, F4, F18ab, F18ac) についてもPCR検査を実施した。解剖豚、環境及び下痢便由来大腸菌合計453株は、培養

後クローニングを行わずにコロニーダイレクトPCR法により、毒素 (*stx2e*, LT, ST), 接着因子 (*eae*, F4, F18ab, F18ac) の保有状況を調べた。ED起因を疑う大腸菌株のO群血清型別は動物衛生研究所に依頼した。薬剤感受性試験はED発症期の母豚糞便から分離された *stx2e* 保有40株、病性鑑定由来11株および終息後母豚糞便由来106株について一濃度ディスク法により硫酸アプラマイシン (APM) 及びCLの感受性を調べた。

結果

ED発症期の母豚糞便117頭中のED関連遺伝子保有率は47.0%であった。内訳は、それぞれ *stx2e* 保有が32.4%, F18abが11.9%, *eae*が7.7%であった。EDに直接的な関連性はないがEAST1が91.5%と高率に検出された。ED関連遺伝子保有豚のうち、浮腫病を誘発する遺伝子組み合わせで最も一般的な *stx2e*+F18ab は4.3%であった。また *stx2e*+*eae* の組み合わせでは1.7%であった。母豚以外の *stx2e*+F18ab 保有率は、解剖豚で53.8%, 環境で41.1%, 下痢便77.8%であった。一方、終息後の母豚糞便由来106株では、LT1が2.8%, ST2が12.3%, EAST1が90.6%であり、接着因子のF18abが25.5%, F4が12.3%, *eae*が9.4%であった。なお、*stx2e* は検出されなかった。分離株のO群血清型について、解剖豚由来株はO139, 環境材料株はO141, 下痢便由来株はO141と単独血清型に集中したのに対し、母豚糞便由来株はO138, O139, O141, O149, 不明と多種類の血清型であった。薬剤感受性試験はED発症期の母豚糞便40株でAPM感受性95%, CL感受性は80%であったが、病性鑑定由来11株はAPM感受性81%に対しCL感受性は54.5%と感受性の低下がみられた。さらに、終息後の母豚糞便由来106株ではAPM感受性株が12.3%でCL感受性株は62.3%であり、APMの体制化顕著であった。

農場対策

当初、母豚糞便スクリーニング検査を実施し、その結果をもとにED関連遺伝子保有母豚と非保有母豚の産出子豚を棲み分ける事で、水平感染リスクの低下を目指していた。しかし、約半数の母豚がED関連遺伝子を保有していた事から、EDのSTECの排菌量の低減化を考慮して母豚全頭に常時使用していたCLを中止し、APM

投与を継続して行った。さらに飼養対策として、子豚の密飼回避のため母豚数を200頭から *stx2e* を検出した母豚を優先的に除外して170頭に削減した。これらの対策の結果、対応開始2カ月後でEDが沈静化した。

考 察

ED発生源の疫学的調査について、分娩1週間以内の母豚糞便のED起因大腸菌の病原遺伝子スクリーニングは農場診断に重要であることが再確認された。また、APMの母豚への投薬も効果を示したと思われるが、薬剤の連続使用による耐性化が懸念された。現在、EDの再発生はみられていないが、薬剤の耐性化を懸念し、APMを中止し再度CLを使用している。今後、3カ月毎にAPMとCLを変更する抗菌剤ローテーションを考え

ているが、別種で静菌性の有効薬剤も考慮に入れ、再発防止対策を模索している。総じて家畜の大腸菌症は抗菌剤のみでのコントロールは困難であることは明白なので、飼養衛生管理を主軸とすることは言うまでもない。豚価高騰の中での飼養密度の緩和は農家にとって厳しいことは承知しているが、母豚数を減らしたことは今回のED沈静化に大きく関わっていると考えている。一方、EDの早期農場対応には、母豚糞便検査の他、解剖豚等によるコロニーダイレクトPCR法による診断が有効であった。ED発生農場からEDを完全に除去するにはAI/AOしかないが、飼養衛生管理と適切な薬剤の使用等によりED低減化を確認すべくEDCD-PCR検査法は有効な手段だと考えている。

[参考] 平成26年度 日本産業動物獣医学会（四国地区）発表演題一覧

- | | |
|--|---|
| <p>1 交雑種肥育牛の黒色腫の1例
久枝啓一（NOSAIえひめ東予家畜診療所）、他</p> <p>2 オオオナモミ中毒による繁殖雌牛の死亡事例
北本英司（香川県東部家畜保健衛生所）、他</p> <p>3 子牛の鉛中毒と血中鉛濃度追跡調査
中田 翔（徳島県徳島家畜保健衛生所）、他</p> <p>4 哺乳子牛のマイコプラズマ性中耳炎発生事例
池上正紘（高知県西部家畜保健衛生所榑原支所）</p> <p>5 卵細胞傾斜培養装置が胚盤胞期牛体外胚の発生率及び低品質体内胚の回復に与える影響について
東山雅人（徳島県農林水産総合技術支援センター畜産研究課）</p> <p>6 牛群検定農場の生産性向上指導
竹内紀恵（高知県畜産試験場）</p> <p>7 乳用牛を受胎牛としたET和子牛の哺育期における代謝プロファイルテスト
彦田夕奈（愛媛県南予家畜保健衛生所）、他</p> <p>8 牛白血病対策雑感
阿部敏晃（徳島県徳島家畜保健衛生所）</p> | <p>9 和牛子牛に見られた胸骨開裂の一例
徳弘令奈（高知県中央家畜保健衛生所）、他</p> <p>10 母豚における浮腫病原因遺伝子保有状況調査
鈴木幹一郎（徳島県徳島家畜保健衛生所）</p> <p>11 採卵用育雛農場におけるIBDワクチネーションについての一考察
徳永麻有香（愛媛県中予家畜保健衛生所）、他</p> <p>12 鳥インフルエンザ遺伝子検査、HA、NA重型同時検出によるH5N1スクリーニング法の検討
尾川誠次郎（徳島県徳島家畜保健衛生所）、他</p> <p>13 一農場における黄色ブドウ球菌性乳房炎の清浄化
今雪幹也（香川県西部家畜保健衛生所）、他</p> <p>14 <i>Salmonella</i> Typhimuriumの汚染が確認された養豚農場における清浄化への試み
飯塚 悟（徳島県西部家畜保健衛生所）、他</p> <p>15 プロイラー鶏舎の消毒効果の評価方法
安藝秀実（高知県中央家畜保健衛生所）、他</p> <p>16 乗用馬にみられたエンドファイト中毒
渡部正哉（愛媛県家畜病性鑑定所）</p> |
|--|---|

[日本小動物獣医学会]

小地区—10

犬の前十字靭帯断裂に対しロングプレートと大型ケージを使用したTTA手術例

須崎信茂，安藤季久見，松本知子，船橋めぐみ，久本和弘，宮武真梨奈

すざき動物病院・香川県

はじめに

犬の前十字靭帯断裂は後肢跛行の原因として良く遭遇する疾患であり、その治療には外科的介入が第一選択と

なる。手術方法は数多く存在し、近年では膝関節の動的安定化手術としてTTAやTPLOが推奨されている。今回、前十字靭帯断裂を起こした犬においてTTAを実施したところ、術前計画よりも大型のケージを使用するこ

とになった。大型のケージを使用することにより、脛骨粗面の前進幅がより大きくなる。現在のところ、それによる合併症はなく、術後経過は非常に良好で順調に経過している。

症 例

症例はウェルシュ・コーギー、避妊雌、8歳齢、14.9kg。既往歴として約2年前に右側後肢の跛行を認め、右前十字靭帯断裂と診断しTTAを実施している。この時に使用したプレートは3穴で4.5mmのケージを使用して、脛骨粗面を前進した。現在では跛行も消失して良好である。

今回は左後肢の突然の跛行を主訴に来院した。触診検査より脛骨引き出し試験が陽性、脛骨圧迫試験も陽性であったため、左前十字靭帯断裂を強く疑った。X線検査でのラテラル像では、脛骨の前方への変位が認められた。また、関節液の貯留像は軽度であると思われた。

治療及び経過

これらの検査結果より左前十字靭帯完全断裂と診断し、TTAを実施することとした。術前計画ではレントゲン写真から骨きりラインを想定し、また、KYON社プレートより共通接線を測定した結果、4.5mmのケージを使用し脛骨粗面を前進させる予定とした。また、脛骨粗面の形状や大きさから3穴プレートを採用予定であった。

全身麻酔による挿管後、手術前に関節鏡下にて断裂靭帯の確認と除去を行い、同時に半月板の損傷の有無を確認したが、半月板の損傷は認められなかった。

手術は仰臥位に保定し、膝関節を中心に内側に切開を加えた。フォーク設置部にドリルガイドを使用して骨孔を作成し、骨きりを行ったところ、プレート設置予定位置にわずかなずれが生じ、使用予定であったプレートと4.5mmケージでは、プレートのスクリュールホールが脛骨体に位置せず、固定不可能な位置となった。また脛骨骨きり部とプレート固定用のスクリュールホールが近接するために、術後の合併症を考慮して、より大型のケージを仮固定し、またロングプレートを使用することにより骨きり部とスクリュールホールの距離を十分保つことが可能となった。ケージには4.5mmより大きいものとして6mmと7.5mmが存在するが、6mmのケージでも、スクリュールホールが脛骨前面に位置するため、脛骨中央での固定を行うために7.5mmケージを使用した。イン

プラントを装着後、常法に従い閉鎖した。

術後の経過は良好で術後3日目より軽度の歩行を開始し、術後1カ月までは軽い歩行程度の運動制限を行った。現在術後6カ月が経過しているが、合併症もなく過去の右側TTAと比較しても今回の術後経過の方が明らかに良好であるとのことであった。

考 察

TTAで使用するプレートサイズは犬の脛骨粗面の形状や大きさにより決定される。またケージのサイズは術前のラテラルX線より、大腿骨顆中心と脛骨プラトー間の共通接線により、脛骨粗面の前進度を決定し、その幅または0.5mm大きい幅をケージサイズとする。通常は脛骨の骨格とほぼ比例して脛骨前進幅が大きくなる。今回の症例では術前計画したケージよりも大きなケージを使用せざるをえない状況となった。

過去に当院で行った他のウェルシュ・コーギー6肢のTTAでは3穴プレート4例、4穴プレート2例であり3穴プレートを使用した症例の脛骨前進幅は3.5mmが3例、4.5mmが1例であった。このことからほぼ同じ体重と骨格形体をした犬と比較して、7.5mmの脛骨前進幅は明らかに過剰な前進幅と言える。過剰な脛骨粗面前進幅にすることにより、術後の後十字靭帯や膝蓋靭帯への負荷の増大が考えられるが、この症例では現時点では両者とも認められていない。このことから、TTAは脛骨前進幅の過剰な矯正を受け入れることが可能な術式である可能性が示唆される。

本来TTA手術は脛骨粗面を前進させることにより膝蓋靭帯と脛骨高平部の傾斜がなす角度(PTA)を90度にすることで脛骨を前方に引き出す力(CrTT)を消失させる手術法である。大型ケージを使用することにより、このPTAが90度以下になることも予想されるため、共通接線法によるケージサイズの決定は特定の犬種や骨格により適応しない可能性があるように思われる。

また脛骨骨きり部とプレートのスクリュールホールが近接することにより、脛骨骨折の合併症発生が高くなると言われている。ロングプレートを使用することにより、その間隔を広げることが可能となり、より合併症発生率を下げる事が可能であると思われる。

以上から、TTAはプレートを安定した位置に設置するためのケージを組み合わせるような場合や、骨きり部とスクリュールホールとの位置関係の矯正など、術中の様々な状態にも対応できる術式であると思われる。

〔参考〕平成26年度 日本小動物獣医学会（四国地区）発表演題一覧

- | | |
|--|---|
| <p>1 腸間膜リンパ節腫大時の超音波画像と開腹所見を比較した犬の7例
金子 仁（かねこどうぶつ病院・徳島県），他</p> <p>2 胸腔鏡下にて心膜切除術を行った特発性心嚢水の犬の1例
船橋めぐみ（すぎき動物病院・香川県），他</p> <p>3 猫消化管好酸球性硬化性線維増殖症の一例
安藤隆徳（安藤動物病院・香川県），他</p> <p>4 食道および胃内異物において内視鏡下異物除去術を実施した犬と猫の27例
山崎裕之（やまさきペットクリニック・香川県），他</p> <p>5 犬に発生した顎嚢胞の1例
金子美紀（かねこどうぶつ病院・徳島県），他</p> <p>6 腫瘍性疾患を疑ったが感染症であった2症例
三谷 聡（あけぼの動物病院・徳島県）</p> <p>7 犬の前十字靭帯断裂に対しロングプレートと大型ケージを使用したTTA手術例
須崎信茂（すぎき動物病院・香川県），他</p> <p>8 四肢全てに骨折が認められた猫の1治療例
東条吉晃（東条動物病院・香川県）</p> <p>9 犬の避妊，去勢手術時に認められた歯科異常について
大林杏子（KOKO どうぶつ病院・香川県），他</p> <p>10 整復困難なウサギの後肢粉碎骨折の2症例
井野寛之（いにはま動物病院・愛媛県），他</p> <p>11 予後の予測に経時的なMRI検査を利用した椎間板ヘルニアの8症例
樋笠正晃（セントラルシティどうぶつ病院・愛媛県），他</p> | <p>12 インドシアニンググリーン+近赤外蛍光の小動物臨床応用の検討
入江充洋（四国動物医療センター・香川県），他</p> <p>13 急性リンパ性白血病の再燃時に皮下腫瘍性病変を形成した犬の1例
光本恭子（佐野獣医科病院・高知県），他</p> <p>14 外科的切除後リン酸トセラニブ投与を行った舌根部唾液腺癌（T1bN3MO）の犬の1例
合田直樹（セントラルシティどうぶつ病院・愛媛県），他</p> <p>15 貧血の原因特定が困難だった犬の1例
橋田好廉（佐野獣医科病院・高知県），他</p> <p>16 犬の白内障に対し超音波水晶体乳化吸引術および動物用眼内レンズ挿入を実施した12例19眼の術後成績の検討
三好拓馬（四国動物医療センター・香川県），他</p> <p>17 チェリーアイに対して下直筋を用いたアンカー法を実施した4例
林 雅人（林獣医科病院・徳島県），他</p> <p>18 自動麻酔記録を導入して—その評価と展望—
久保 剛（久保動物病院・香川県）</p> <p>19 心停止蘇生後に心機能の経時的变化をおった犬一症例
大林浩二（KOKO どうぶつ病院・香川県），他</p> <p>20 経腸栄養学的支持を行った慢性腎臓病ネコの1例
麻野良太郎（麻野獣医科病院・香川県）</p> <p>21 若齢大における脛骨近位部骨折の4症例
井野寛之（いにはま動物病院・愛媛県），他</p> |
|--|---|

〔日本獣医公衆衛生学会〕

公地区—5

**ジフテリア毒素原性陽性 *Corynebacterium ulcerans* の
徳島県内におけるネコの浸潤状況と患者発生事例について**

小山絵理子¹⁾，石田弘子¹⁾，矢野さやか²⁾，下野生世³⁾，嶋田啓司¹⁾，山本明彦⁴⁾，他

1) 徳島県立保健製薬環境センター，2) 徳島県動物愛護管理センター，
3) 徳島県食肉衛生検査所，4) 国立感染症研究所

はじめに

ジフテリア毒素原性陽性 *Corynebacterium ulcerans* (以下「*C. ulcerans*^{Tox+}」という) はヒトに対しジフテリア様の臨床像をきたす動物由来感染症の起因菌であり，日本では2001年に初めて患者が確認されて以降，現在までに13例の患者報告がある。症状は，咽頭痛，上咽頭痛の白色偽膜等いわゆるジフテリア症状や皮下膿瘍の症例も報告されており，患者周辺のネコから当該菌が分離され，2009年に厚生労働省から注意喚起の通知が出されている。

ジフテリアは「感染症の予防及び感染症の患者に対する医療に関する法律」(以下「感染症法」という) で全数把握の二類感染症に指定されており，患者数は把握されている。しかし，類似の症状である *C. ulcerans*^{Tox+} による感染症は届出規定がなく，十分に把握されていないのが現状である。

徳島県では，動物由来感染症対策として，平成16年に「徳島県動物由来感染症検討会」を設置し，医療・獣医療・行政の連携体制を構築してきた。*C. ulcerans*^{Tox+} による感染症についても，患者発生に備え県内に生息するネコの浸潤状況調査及び情報提供を実施してきたが，

これまで県内での患者の発生は確認されていなかった。このような状況下、2014年4月、*C. ulcerans*^{Tox+}による患者が発生し、これまで構築されていた連携体制により迅速な対応を行うことができたので、浸潤調査結果と合わせて報告する。

材料及び方法

ネコの浸潤調査については、2011年1月～2012年10月の期間に動物愛護管理センターに収容されたネコの咽頭スワブ241検体と血清166検体を材料として、保健製薬環境センターにて咽頭スワブの培養検査を実施し、国立感染症研究所にて血清の抗毒素価測定を実施した。培養検査法としては、シードスワブγ2号（栄研化学株）を用いて咽頭部を拭き取り、勝川変法荒川培地（株）日研生物医学研究所）に塗抹後、37℃ 2～3日間好気培養した。その後、疑わしいコロニーを釣菌し、スクリーニング検査後、アピコリネ（シスメックスバイオメリユー株）で同定した。また、*C. pseudotuberculosis*との鑑別検査としてトレハロース分解試験を追加した。*C. ulcerans*と同定された菌株については、病原体検出マニュアルに準じ、PCRでジフテリア毒素産生遺伝子を検出した。

また、2014年4月の*C. ulcerans*^{Tox+}患者発生事例については、患者と家族の咽頭スワブと血清及び飼い猫の眼脂・咽頭・皮膚スワブを検体とした。スワブ検体は、保健製薬環境センターで同定及びジフテリア毒素原性検査を、血清は、国立感染症研究所にてジフテリア抗毒素価を測定した。検査はネコの浸潤調査時と同様の方法で実施した。

結果及び考察

(1) ネコの浸潤調査結果：咽頭スワブ241検体中10検体から*C. ulcerans*^{Tox+}が分離され、保菌率は4.2%であった。抗毒素価が検出下限以上の個体は166検体中20検体（12%）であり、その内13検体は菌分離陰性の個体だった。菌分離したネコの県内分布に偏りは認めら

れなかった。

(2) 患者発生事例：6歳児、左頸部の疼痛を伴う腫脹、発熱の症状があり、化膿性リンパ節炎と診断された。皮膚病の飼い猫と接触しており、動物愛護管理センター、保健所により聞き取り調査、検体採取等を行い動物由来感染症対策として対応した。飼い猫は既に動物病院で治療が行われており、調査時の所見としては、背部に皮膚炎の痕が1カ所見られたものの既に痂皮を形成し、鼻水等は認められなかった。検査は保健製薬環境センターと国立感染症研究所で実施し、患者から*C. ulcerans*^{Tox+}が分離された。家族において*C. ulcerans*^{Tox+}は分離されなかったが、患者及び家族の抗毒素価は高かった。飼い猫は、治癒傾向にあったためか*C. ulcerans*^{Tox+}は分離されなかったが、感染源であることが強く疑われた。

また、浸潤調査結果から県内のネコが広く感染を受けていると考えられ、ヒトへの感染が危惧されつつも感染症法に届出規定のない今回の様な動物由来感染症にはより迅速な対応が求められる。本事例では、これまでに構築していた医療・獣医療・行政の連携体制が機能し、大きく役割を果たした。

本感染症は、ジフテリアと同様、エリスロマイシン等の抗生物質等による治療が有効である。DPT1期を接種した6歳児の87%はジフテリア抗毒素価がジフテリア発症予防の0.1IU/mlを超えていると報告されており、予防接種完了後の小児では*C. ulcerans*の感染は起こりにくいと考えられていた。本患児もDPT1期を終了しており、入院時の抗毒素価は充分であったため、重症化を防ぐことができていた可能性がある。今回の事例から、逆に抗毒素価血清を有していても、リンパ節炎程度の病変は発症しうることが示唆された。

今後は、患者からのウルセランス菌株の解析をすすめ、疫学調査のみならず感染防止の啓発に役立てるように関係部局、医療機関及び動物病院と情報共有し、更なる連携による迅速な対応を図っていきたい。

〔参考〕平成26年度 日本獣医公衆衛生学会（四国地区）発表演題一覧

- | | |
|--|---|
| 1 香川県内で発生した日本紅斑熱について
寺嶋由佳理（香川県環境保健研究センター），他 | 7 徳島県における各種動物のトキソプラズマ抗体保有状況について
藤本貴大（徳島県動物愛護管理センター），他 |
| 2 と畜場に搬入された愛媛県産豚におけるE型肝炎ウイルス浸潤状況
藤江香予（愛媛県食肉衛生検査センター），他 | 8 牛に寄生する住肉胞子虫 <i>Sarcocystis cruzi</i> の汚染濃度調査
程野恵理子（徳島県食肉衛生検査所），他 |
| 3 高知県のブタにおけるノロウイルス感染調査
森光俊晴（高知県衛生研究所），他 | 9 豚丹毒判定におけるリアルタイムPCRの活用方法の検討
上原祐介（香川県食肉衛生検査所），他 |
| 4 91日齢未満犬の狂犬病移行抗体調査
長崎淳一（善通寺犬猫病院・香川県），他 | 10 家畜に高頻度で経口投与される薬剤の試験法の検討について
魚住佳世（徳島県食肉衛生検査所），他 |
| 5 狂犬病ワクチン2回注射での抗体応答確認
長崎淳一（善通寺犬猫病院・香川県），他 | 11 飼料への抗生物質混入が原因であった豚の抗生物質残留事例について
細身卓司（高知県食肉衛生検査所），他 |
| 6 ジフテリア毒素原性陽性 <i>Corynebacterium ulcerans</i> の徳島県内におけるネコの浸潤状況と患者発生事例について
小山絵理子（徳島県立保健製薬環境センター），他 | 12 災害発生時におけるペット動物の同行避難に関する意識調査
穀内瑤子（徳島県西部総合県民局），他 |